

チベット訳『宝篋経』—和訳と訳注（4—2）

五 島 清 隆

1 はじめに

本稿は、五島 [2013] [2014] [2015a] [2018] の続編であり、今回でチベット訳全4巻の和訳が完結する。前回の（4—1）では、プールナ・マイトレーヤニープトラの、マンジュシュリーによる異教徒（裸形行者）の教化に関する回想が終わり、その後日譚のごとく、弟子を奪われた当の裸形行者サティヤカがそのことを訴えに仏陀のところに訪ねて来る。それに対して対応し、マンジュシュリーの行動を擁護したのは、遊行者ジャヤマティである。（4—2）ではこのジャヤマティが主人公であり、彼がマンジュシュリーの教えを聞いて大乘仏教徒に転じる経緯が説かれる。

2 和訳と訳注

XI-1 ジャヤマティへのマンジュシュリーの説法

そのとき、世尊は遊行者ジャヤマティにこう仰せになられた。「ジャヤマティよ、サティヤカ・ニルグランティープトラとともに行ってしまった一万二千のニルグランタ（裸形行者）たちを、汝は見たかな」

〔ジャヤマティが〕申し上げる。「世尊よ、見ました」

世尊が仰せになる。「ジャヤマティよ、彼らはすべて、マイトレーヤ（弥勒）如来の最初の集会（初会 *parathamasamnipāta）〔への参集者〕の数に含まれるであろう。なぜなら、このように、彼らはこの甚深の法が [H443b] 説か

れるのを聞いたからである。サティヤカ・ニルグランティープトラは、ちょうど、今の私の弟子（*bhikṣu）であるシャーリプトラと同じように、マイルレーヤ如来の教えにおいて、弟子（*śrāvaka）たちの中で智慧の最も [Zh740] 優れた者となるであろう。なぜなら、このように彼には私に対する信解があるからである。[ただし、今は]⁽¹⁾ 思い上がりの気持ち（*adhimāna）⁽¹⁾ 故に間違った見解を捨てられないのである」

その時、遊行者ジャヤマティはマンジュシュリー法王子に次のように言った。「マンジュシュリーよ、後の時代、後の時節、最後の五百年において、増上慢（*abhimāna）⁽²⁾ を抱く比丘たちが、⁽³⁾ わずかとはいえ⁽³⁾、生じることでしょう」

[マンジュシュリーが] 言う。「良家の子よ、後の時代、後の時節、最後の五百年において、増上慢を抱く比丘たちが生じることはありえませんが（*durlabha）。なぜなら、良家の子よ、四禪を生じなければ増上慢に陥ることはあり得ないからです。なぜなら、そのように、その時には比丘たちは安定した心でいること（*cittasthiti）は困難であり、まして四禪に入ることなど不可能だからなのです。[P311b] 良家の子よ、それゆえ、後の時代、後の時節、最後の五百年において、増上慢を抱く比丘たちが生じることはあり得ないので。しかしながら、良家の子よ、増上慢を抱く者には2種あります。2種とは何かと言え、見解に執着するあまり禪定に関して増上慢を抱く者と、[H444a] 利得・名声〔を求めるが〕ゆえに、優れた家系（*āryavaṃśa）、戒律、多聞、頭陀行、知足（*saṃlekha）ということだけで増上慢に陥る者とです。この2種が増上慢を抱く者なのです。誰であれ増上慢に陥って如来が語られた法と律とを捨てる人は、地獄・畜生・ヤマの世界（餓鬼）に赴くこととなります」

[ジャヤマティが] 言う。「マンジュシュリーよ、他人の心を知ることがなければ、『この人は増上慢を抱いている』とどうして知ることができるでしょう

1) Tib:lhag pa'i nga rgyal. Ch1: 貢高輕慢意. Ch2: 我慢.

2) Tib:mngon pa'i nga rgyal. Ch1: 貢高 Ch2: 増上慢.

3) Tib:ji snyed cig (*kiyat). Ch1, 2: 多.

か」

〔マンジュシュリーが〕言う。「(1) もし、『凡夫の人が涅槃に [Zh741] 入ることがあるとしても、阿羅漢〔が涅槃に入ること〕はない』ということを知って怖れるならば、増上慢のある人だと理解すべきです。(2) もし、『凡夫の人が如来を見ることがあるとしても、阿羅漢〔が如来を見ること〕はない』ということを知って畏れるならば、増上慢のある人だと理解すべきです。(3) もし、『凡夫の人が布施を浄化することがあるとしても、阿羅漢〔が布施を浄化すること〕はない』ということを知って怖れるならば、増上慢のある人だと理解すべきです。(4) もし、⁴『凡夫の人が如来を喜ばせる (*ārāgayati) ことがあるとしても、阿羅漢が〔如来を喜ばせること〕は [H444b] ない』⁴⁾ということを知って畏れるならば、増上慢のある人だと理解すべきです。(5) あらゆる煩惱に動揺しない人は拠り所 (*āśraya) をもたない人です。拠り所をもたない人は世間における福田です。[P312a] 煩惱によって動揺する人は拠り所をもつ人です。拠り所をもつ人は世間における福田ではありません。このことに関して論争する人は増上慢のある人だと理解すべきです。(6) ⁵『一切諸法は生起する』というこの甚深の法のあり方 (道理 *naya) を理解しない人⁵⁾は増上慢のある人だと理解すべきです。(7) 『一切諸法は深く理解 (*parijñā) することはできない。捨て去ることもできない。修習することもできない。直証することもできない』という真実のあり方に入らない人々は増上慢のある人だと理解すべきです」

〔ジャヤマティが〕言う。「マンジュシュリーよ、増上慢がない人の印 (*mudrā) とはどのようなものですか」

〔マンジュシュリーが〕言う。「逆らうことなく論争することのないことが増上慢のないことです。良家の子よ、たとえば、[Zh742] 獣の王であるライオン

4) Ch1: 如來讚歎凡夫之士，不學阿羅漢。Ch2は(4)全体を欠く。

5) Tib:chos thams cad ni 'byung ba'o zhes bya ba'i chos zab mo'i tshul (KT:mo 'di la) 'di gang gis mi rtogs pa. Ch1: 一切諸法但以言説而爲受。Ch2: 一切諸法攝入涅槃若於是中分別觀察。なお、IX-3には「一切の法はまったく生起することがない」とあり、大乘の空性論から見てもここは「一切諸法は生起しない」とあるべきところだろう。

はあらゆる音声を怖れることはありません。そのように、良家の子よ、増上慢のない比丘はあらゆる音声を怖れることはありません。なぜなら、このように、彼はあらゆる法は木霊のようなものだと知っているからです。木霊には心も意も [H445a] 識もありませんが、⁽⁶⁾→それ（しかるべき条件）によって音声は生じるのです。⁽⁶⁾同様に、彼は心と意をも正しくあるがままに知っており、彼はあらゆる音声条件（縁）に依拠することを理解し、彼はあらゆる音声に囚われの感情を起こすことはありません。彼は仏陀の声であろうと愛着（*anunaya）することはなく、愚かな人の声であろうと怒りを生じることはありません。清浄なる声に愛着することはなく、煩惱の声に対して怒りを生じることはありません。彼はあらゆる音声の始まり（*pūrvānta）と終わり（*aparānta）を理解していますが、これが、良家の子よ、彼に増上慢がないことの印です。（1）下がることなく上げることのない印、（2）あるがままという印、（3）集積（*samudānaya）という印、（4）⁽⁷⁾→本性（本来的なもの）の特質（*prakṛtilakṣaṇa）という印⁽⁷⁾、（5）一つの道理（*ekanaya）に入るという印、（6）⁽⁸⁾→法界への流入（*dharmadhātusamavasaraṇa）⁽⁸⁾ [P312b] という印、（7）⁽⁹⁾→区分別のない真如（*abhinnatathatā）⁽⁹⁾ という印、（8）真実の究極（実際）に住するという印、（9）勝義の空性という印、（10）三世の平等性という印、（11）無始時来の不生という印、（12）本性の観察（*prakṛtipratyavekṣā）という印なのです。良家の子よ、それらの印によって印づけられた（*mudrāmudrita）一切法を増上慢のな

6) Tib:de la rten (HKN:brten) cing sgra 'byung bar 'gyur ro. Ch1: 用因縁合故其音響出. Ch2: 一切音聲皆從縁起無有眞實. ここは、此縁性（idampratyayatā、これを縁とすること）を前提とした表現。

7) Tib:rang bzhin gyi mtshan nyid kyi (Ph:kyis) phyag rgya'o. Ch1: 其相自然印. Ch2: 正見道印.

8) Tib:chos kyi dbyings su yang dag par (omitted in KT) 'du ba. Ch1: 以一印入爲法界平等御印. Ch2: 入法界平等印. *Mvy* 527: sarvadharnasamavasaraṇasāgaramudrā nāma samādhiḥ, chos thams cad yang dag par 'du ba'i phyag bya zhes bya ba'i ting nge 'dzin. (一切の法が流入（集合）する大海を印とする、という名の三昧) Cf. *VKN* III-6: 「[法は] 法界に流入している」 dharmadhātusamavasaraṇaḥ.

9) Tib:de bzhin nyid tha mi dad pa'i phyag rgya'o. Ch1: 無所壞印. Ch2: 如不壞印. Cf. *SP* 473.7-8: 「しかしながら、この『白蓮華のごとき正しい教え』という法門は、言ってみれば、区分別のない真如なのです」 api tv ayaṃ saddharmapuṇḍarīko dharmaparyāyo yad uta asaṃbhinnatathatā.

い比丘が [H445b] 聞けば、疑念も疑惑も抱くことはないであろう。我を対象として考えることも無いであろう」

XI-2 ジャヤマティへの仏陀の説法

その時、[Zh743] 遊行者ジャヤマティは世尊に次のように申し上げた。「世尊よ、私は以前にも、遊行者ウドラカ¹⁰⁾と⁽¹¹⁾[私の]一族である遊行者『月をもつ（月に照らされる）者』⁽¹¹⁾から、この大乘の功德を称賛する話を、いささかですが、聞いていました。世尊よ、私は今もまた、マンジュシュリー法王子から正しい教えを説くのを聞いて、無上正等覚への心を起こしました。私が悟りに至る修行（菩提分法）を積み、速やかに無上正等覚を悟ってのち、無量無辺の有情の利益のために働けるよう、世尊もまた、私に対して、是非とも、教えを説いて下さいますようお願い致します」

世尊が仰せになる。「ジャヤマティよ、菩薩たちのこの法は二つあり、速やかに無上正等覚を悟るのである。二つとは何かと言え、つまり、精進（*vīrya）と不放逸（*aparamāda）である。そのうち、（1）精進とは何かと言え、法に従って求め [H446a] 手にした財物をすべて放棄することである。不放逸とは何かと言え、異熟すること（布施の返報）を望むことなく悟りへと廻向することである。さらに、（2）精進とは不善の法をすべて捨て、善法をすべて成就するよう努力することである。[P313a] 不放逸とは戒律が清浄で、⁽¹²⁾あらゆる生を望むことなく⁽¹²⁾、悟りへと廻向することである。さらに、（3）精進とは身心を顧慮せず忍耐し、勇敢であることである。不放逸とは怒りのない心によって [Zh744] すべての有情を守護することである。さらに、（4）精進とは善法を成就することに倦むことのないことである。不放逸とは成就した善法をすべて一切知者性へと廻向することである。さらに、（5）精

10) Tib:kun tu rgyu lhag spyod (KT:su tra ka → u tra ka ?). Mvy 3516 :udrako rāmaputraḥ, rangs byed bu lhag spyod. Ch2: 鬱闍異道人親友。

11) Tib:snag gi gnyen (Ph:gis nyin) mtshams kun tu rgyu zla ba can. 2 漢訳はこの部分を欠く。本経にジャヤマティが初めて登場するときにもこの名が出ている（五島 [2018] 13頁）。

12) Tib:skye ba thams cad mi 'dod pas. Ch1: 不願諸所. Ch2: 不爲後生.

進とは、禪定の支分を⁽¹³⁾成就することに倦むことのないことである^(←13)。不放逸とは禪定の味を享受することから引き下がる知のことである。さらに、
 (6) 精進とは多聞を求めることに飽きないこと (*asamtuṣṭa) である。不放逸とは正しい瞑想 (如理作意) に住するという聖者 (*ārya) の智慧と知識のことである。さらに (7) 精進とは〔四〕摂事を [H446b] 捨てないことである。不放逸とは有情を成熟させる方便のことである。さらに (8) 精進とは身心を統御すること (*pragraha) である。不放逸とは身心が遠離していること (*vivikta) である。さらに (9) 精進とは有情を対象とした慈心によってすべての有情に対して平等であることである。不放逸とは法を対象とした慈心によってあらゆる法を見ないことである。さらに、(10) 精進とは他の有情 (*sattva)、他の人 (*pudgala) を菩提心へと結びつけることである。不放逸とは幻の如き法を観察して⁽¹⁴⁾菩提心を忘れないこと^(←14)である。さらに (11) 精進とは神通 (*abhijñā) の知を起こすことである。不放逸とは漏 (*āsrava) を滅尽して〔感官を〕守ることである。さらに (12) 精進とは頭や服が火で燃えているがごとくに真実を求めることである。不放逸とは滅 (*nirodha) を直証することに陥らないことである。さらに (13) 精進とは [P313b] 相好 (*lakṣaṇavyañjana) を [Zh745] 完成するために、善根に満足しないことである。不放逸とは法身を観察することである。さらに (14) 精進とは仏国土を浄めることである。不放逸とは⁽¹⁵⁾有情の国土 (田地)^(←15)を浄めることである。さらに (15) 精進とは三十七の悟りに至る修行項目 (菩提分法) [H447a] を完

13) CKNT:yongs su rdzogs pas mi skyo'o. DHPPH:yang dag par bsgrubs pas yongs su mi bsngo ba'o. Ch1: 無厭. Ch2: 心無疲倦.

14) Tib: byang chub kyi sems mi rjed (PT:brjed, Ph:brjod) pa'o. Ch1: 不捨道也. Ch2: 不捨離一切智心.

15) 「有情の国土 (田地)」 (Tib:sems can gyi zhing *sattvakṣetra) については以下に挙げる『入法界品』の一節が参考になる。

rāgadoṣaṭṭrīṇathānukantakaṃ dṛṣṭisaṅgabahukaṃ kṣatāṅkuram |

sattvakṣetrapariśodhanārthikaḥ prajñalāṅgala dṛdham gaveṣate || (Gv 381.13-16)

貪欲〔などの〕欠点という草・切り株・刺があり、邪見という執着〔の根〕が多く、〔信という〕芽が損なわれてしまっている有情の田地を清浄にしたいと願う者 (善財童子) は、智慧という強固な鋤を求める。

成することである。不放逸とは寂靜なる解脱というあり方で解脱することである。

良家の子よ、要するに、方便に巧みな菩薩の行動 (*karman) である限り、彼らは精進を有していると見るべきであり、智慧波羅蜜の行動である限り、彼らはすべて不放逸を有していると見るべきなのである。それゆえ、方便と智慧を獲得した菩薩には無上正等覚から退転する恐れはほんのわずかもないのである」

XI-3 仏陀の微笑とその理由を訊ねるアーナンダ

この教えが説かれた時、遊行者ジャヤマティは存在（法）が〔本来〕不生であることを容認する知（無生法忍）を獲得した。彼は心喜び、歡喜し、狂喜して、彼自身は、⁽¹⁶⁾→7ターラ樹ほどの高さまで空中に上昇したのだった⁽¹⁶⁾。この三千大千世界も六種に震動した。また、大きな光が世界を覆った。空中から大いなる華の雨が降り注ぎ、⁽¹⁷⁾→樂器 (*tūrya) や合唱 (*saṃgīti) の音響が生じた⁽¹⁷⁾。

⁽¹⁸⁾→さて、その時、世尊は微笑まれた。諸仏世尊の決まり (*dharmatā) によって [H447b] 微笑まれたその時、世尊の口（面門）からは無数の色、種々の色、たとえば、青・黄・[Zh746] 赤・白・茜色・水晶色・銀色の如き色の光が生じ、そ〔の光〕は、[P314a] 限りもなく果てしもない諸々の世界を照らし出して覆い、ブラフマー神の世界まで昇っていき太陽や月の光をも圧倒してのち、再び戻ってきて、世尊のまわりを三回めぐり、世尊の頭頂 (*mūrdhan) のなかに消え去った。⁽¹⁸⁾

その時、具寿アーナンダは座から立ち上がり、偏袒右肩して右膝を地に着けて世尊に向かって合掌して礼拝し、世尊に対して、微笑まれた意味を詩頌¹⁹⁾に

16) Cf. SP 409.8-9 : 「そのとき、〔一切衆生喜見菩薩摩訶薩〕は空中にターラ樹の7倍の高さまで上昇し……」 tasyāṃ velāyāṃ saptatālamātram vaihāyasam abhyudgamyā...

17) Cf. SP 405.5-6 : 「百コーティもの天子たちが、〔日月淨明德如来を供養するために〕樂器やシンバルや合唱の音を響かせていた」 koṭīśatam devaputrāṇāṃ tūryatādāvacarasaṃgītisaṃprabhāṇitenāvasthitam abhūt.

18) この部分の定型表現とその意味については、五島 [2001]32-33頁（注56, 57）を参照。

よって訊ねた。

- 1 「⁽²⁰⁾〔世尊は〕比類のない功德、智慧、力、吉祥、〔さらに〕後光（円光）の光輝によって飾られ、三十二相によって飾られ、〔八十の副次的な〕相によって彩られて（*vicitrita）います^{←20}。⁽²¹⁾性格が優れ雄々しいライオンの如く歩み、勇気ので溢れています^{←21}。何故に微笑まれたのか、それを世尊はお説き下さい。
- 2 牟尼〔のお声〕は夏雲（雷雲）や太鼓が出す音、ライオンの吼え声より優れています。カラヴィンカの鳴き声、鐘（*ghaṇṭā）の音、梵天の声より優れています。[H448a] 三千世界において聞かれる天人や人間の声が全て同時に〔発せられて〕も及びません。牟尼・世尊のお声は最上です。
- 3 優れた阿羅漢、独覚、正〔等覚を目指す〕菩薩であろうと、比類なき仏陀（*Munīndra）の驚嘆すべき智慧の領域を理解することはありません。天人・アスラ・ナーガも聞けば優れた悟りを求めますので、なぜ微笑みを示されたのか、かの智慧の力に依ってお語り下さい。
- 4 あなたは、心はあらゆる極端（辺）への執着から離れ、その優れた知は中〔道〕にも囚われていません。その行動は、執着なく欠点なく〔何かに〕住まることもなく、無限の虚空の [Zh747] ようです。どんな優れた比喻も〔あなたを表現でき〕ません。優れた世間の類似例を〔いくら挙げて〕も数えきれないほどです。邪悪さとは無縁の虚空の如き智慧のあるお方、どうして微笑まれたのか、あなたにお伺い致します。

19) 以下に挙げられた詩頌は、チベット訳では各句13音の4句から成り、漢訳では Ch1が7字8句、Ch2が5字8句の構成になっている。

20) Cf. *Divy* 41.3-4 : 「かの婆羅門の娘は、32の偉大な人の特徴（三十二大人相）によって飾られ、80の副次的特徴（八十種好）で身体が輝き、〔身体の周りが〕一尋の光明（円光一尋相）で飾られ、太陽の千個分を超える輝きを持ち、動く宝石の山（スメール山）の如く、あらゆる点で端嚴な世尊を見た」 *adrākṣīt sā brāhmaṇadārikā bhagavantam dvātrimśatā mahāpuruṣalakṣaṇaiḥ samalaṃkṛtam aśītyānuvyañjanair virājitagātram vyāmaprabhālaṃkṛtam sūryasahasrātirekaprabham jaṅgamam iva ratnaparvataṃ samantato bhadrakam.*

21) Tib:seng ge (Ph:ge'i) ngang mchog 'gying 'gro ltar ni brtson 'grus stobs kyis byung. Ch1: 如師子在衆中行歩威猛勢至. Ch2: 行如象師子精進力勇出.

- 5 あなたの口（面門）から、青・赤・白の様々な〔色の〕光が、純金の如くに輝き、[P314b] ガンジス河の砂の数ほどの光線（*kirāṇa）²²⁾ が生じました。無量の虚空界、あらゆる方角の世界を照らし出しました。牟尼の光に触れた悪い生存状態（*durgati）〔にある生き物たち〕は残らず〔苦が〕鎮まり安穩になりました。
- 6 もし、光があなたの膝へと消えていった場合、阿羅漢の予言をします。光があなたの上腕部へと消えると、独覚の予言があります。今は、〔人々に〕利をもたらす（*hitakārin）牟尼たるあなたの清浄なる頭頂へと光は消えましたので、あなたは、一切知・平等性の乗（大乘）への予言をきくと [H448b] なさいます。
- 7 それゆえ、優れた人、天人を越える天人（*devātideva 仏陀）は三界を供物として捧げるにふさわしい方なのです。多くの生き物（*prāṇin）たちは〔あなたがお話になれば〕聞いて喜び、歡喜します。真実の正しい言葉、確固たるお言葉をジナ（仏陀）はお語り下さい。なぜ微笑まれたのかという疑問を断ち切って、弟子（*śiṣya）たちを喜ばせて下さい」

XI-4 ジャヤマティへの成仏の予言

そう要請されて世尊は、具寿アーナンダにこう仰せになられた。「アーナンダよ、ジャヤマティという名の良家の子が〔無生法〕忍を得て、空中7ターラ樹ほどの高さにおいて私に向かって合掌し、敬意を示し、十万の天人たちが供養しているが、それを汝は見たかな」

〔アーナンダが〕言う。「世尊よ、見ました」

世尊が仰せになる。「アーナンダよ。良家の子であるこのジャヤマティは、転輪聖王（*cakravartin）であったとき、72コーティの仏陀のもとで善根を植え、そのすべての仏陀・応供に対して、在世中も、般涅槃なされた時も、[Zh748] 供養をした。72コーティの仏陀のもとで梵行を實踐し、〔かれら〕すべてのもとで正法を護持したのである。アーナンダよ、良家の子であるこのジャヤマティは、今以降も、数えられないほどの〔数の〕如来たちを喜ばせ（*ārāgayati）、[H449a] 敬意（*satkāra）を表し、尊敬（*gurukāra）し、尊崇

(*mānanā) し、供養 (*pūjanā) するだろう。梵行を [P315a] 実践し、無量無数の有情たちを悟りへと成熟させるだろう。彼は後の時代に、悟りに至る修行項目 (菩提分法) を完成して、無数の劫 [を過ぎて] のち、^(23→)エーカラトナヴィューハ (一宝の莊嚴)^(←23) という劫、^(24→)プリヤダルシャナ (見るのが喜ばしい)^(←24) という世界において、^(25→)ジュニャーナラーシ (智の集積)^(←25) という名の如来・応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・調御丈夫・無上士・天人師・仏陀・世尊として、世に生じるであろう。アーナンダよ、そのプリヤダルシャナ世界において享受するもの (*bhoga) は他化自在天のようであり、その有情たちの眼前には、六種の認識対象としては心に適うものしか生じないであろう。有情たちはすべて互いに見て喜び、心地よくなるであろう。有情たちはすべて、夢の中でも、かのジュニャーナラーシ如来を見て [H449b] 仏を念ずること (仏随念) から離れることはないであろう。それゆえ、かの世界は [Zh749] プリヤダルシャナ (見るのが喜ばしい) というのである。その劫においては、かの如来がお一方だけ出現され、^(26→)その如来の寿命も一劫が可能であろう^(←26)。それゆえ、その劫はエーカラトナヴィューハ (一宝の莊嚴) といわれるであろう。かの世尊の僧団は菩薩だけで [構成され]、92コーティの菩薩 [の数] になるであろう。^(27→)菩薩・摩訶薩はすべて、例外なく、不退転であり、弁舌は滞りなく (*pratibhānasamvid)、言葉の違いに通じている。^(←27) かのジュニャーナラーシ如来が般涅槃なされる時も、^(28→)シンハヴィクラマガティ (ライオンの誇り高い歩みを歩む者)^(←28) 菩薩に、『良家の子よ、この [P315b] シンハヴィ

22) Tib: dmar ba. Ch1: 妙暉. Ch2: 炎.

23) Tib: rin po che gcig (Ph: cig) bkod pa (*ekaratnavyūha). Ch1: 一寶嚴淨. Ch2: 一寶嚴.

24) Tib: blta (CP: lta) na sdug pa (*priyadarśana). Ch1: 喜見. Ch2: 嬉見.

25) Tib: ye shes phung po (*Jñānarāśi). Ch1: 慧王. Ch2: 智光.

26) Tib: de bzhin gshegs pa'i tshē'i tshad kyang bskal par thub par (KPh: pa) 'gyur te. Ch1: 如来教授一劫爲作佛事, 其正覺壽亦一劫. Ch2: 施作佛事, 佛及衆生壽等一劫..

27) Tib: byang chub sems dpa' sems dpa' (omitted in Ph) chen po thams cad kyang phyir mi ldog pa, spobs pa thogs pa med pa, tshig dbye ba la mkhas pa sha stag go. Ch1: 皆不退轉, 諸菩薩逮無所罣礙慧, 起光德本. Ch2: 皆是初會得不退轉.

28) Tib: seng ge'i rtsal gyis 'gro ba (*simhavikramagati). Ch1: 師子過而行. Ch2: 師子進去. *Mvy* 6478 : simhavikramah, seng ge'i rtsal. Cf. *LV* 300.1-2 :

yaḥ simhavikramagatiḥ saptapadā vikramī asamūdhah /

クラマガティ菩薩は私の次に、^(29→)シンハナーダナーディン（ライオンの雄叫びを叫ぶ者）^(←29)という如来となるであろう』と予言して般涅槃するであろう。かのジュニャーニャラーシ如来が般涅槃した後、10小劫の間、正法は持続するであろう。かの世尊の身体（遺骨）は滅することはないであろう。それに対して人々が供養する宝塔がただ一つあるであろう。^(30→)その幅は64ヨージャナ（由旬）、高さは80ヨージャナであり^(←30)、[H450a] あらゆる宝で飾られている」

XI-5 ジャヤマティによる仏陀讃嘆

その時、良家の子であるジャヤマティは、空中から降りてきて、世尊の両足に頭をつけて礼拝し、世尊の周りを三回まわって後、世尊に向かって、^(31→)「法界との無区別（*abhinna）」^(←31)に関する、これらの詩頌で讃嘆した。

- 1 「^(32→)私の界（領域）^(←32)、有情の界、法の界、[Zh750] それらは同等です。それを界としているのが知の界です。それゆえあなたは私に予言なさいました。
- 2 ^(33→)法の界^(←33)、^(34→)煩惱の界^(←34)、空の界、それらは同等です。あらゆる法はそれを界としています。それゆえあなたは私に予言なさいました。
- 3 ^(35→)貪瞋癡とその他の界との三つ（三界）^(←35)は虚空の界と同等です。それ

brahmasvarām atha giram pramumoca jagaty aham śreṣṭhaḥ // LV 26.8 //

ライオンの誇り高い歩みで、意識乱されることなく、七歩歩んで、「私は世界において最も優れた者である」という梵天の声にも比せられる〔清らかな〕声を発したのは、この人です。

29) Tib:seng ge'i sgra sgrogs pa. Ch1: 師子過而行. Ch2: 師子相. Mvy 685: simhanādanādin, seng ge'i sgra sgrags.

30) Tib: rgyar (CH:brgyar, KT:zheng du) dpag tshad drug cu (P:bcu) rtsa bzhi pa, 'phang du dpag tshad brgyad cu (P:bcu) pa (omitted in K). Ch1: 廣長二千四百里, 高三千二百里. Ch2: 縱廣六十由旬, 高八十由旬.

31) Tib:chos kyi dbyings dang tha mi dad pa. Ch1: 法界無所壞. Ch2: 不壞法界. 注9 参照.

32) Tib:bdag gi dbyings. Ch1: 我種. Ch2: 色界.

33) Tib:chos kyi dbyings. Ch1: 法界. Ch2: 受界.

34) Tib:nyon mongs khams. Ch1: 塵勞. Ch2: 煩惱界.

35) Tib: 'dod chags zhe sdang gti mug dang // gang (C:gar) (Ph adds :kyi) gzhan khams kyang (Ph:gang) gsum po dag // Ch1: 法疆姪欲種 瞋怒亦如此. Ch2: 法界及欲界 及與於三界.

ゆえあなたは私に予言なさいました。

- 4 輪廻〔の界〕と涅槃〔の界〕、法の界、それらは同等です。風の界、水と火と地の諸〔界〕は、それ（法）を界としています。
- 5 蘊の界とも同等です。眼などの界と意の界と法の界、それらすべての界は同等です。
- 6 有為の界たるもの、無為の界たるもの、それらは [H450b] 法界として不二です。それゆえあなたは私に予言なさいました。³⁶⁾
- 7 五蘊は知を離れています。〔六〕界も〔十二〕処も〔知を離れています〕。〔それらは〕概念（名）としても、物体（色） [P316a] としても存在しません。内的にも、外的にも存在しません。
- 8 〔本来非存在である〕声によって知ることになるのですが、牟尼は私に予言なさいました。声によって語られた通りに私は予言を受けました。³⁷⁾
- 9 仏陀は私に予言するというお考えはお持ちではありませんし、私にも〔これが〕正等覚への予言だという認識はありません。
- 10 仏陀は私と同じであり、私はスガタ（仏陀）と同じです。すべての有情も同様です。それゆえあなたは私に予言なさいました。
- 11 この予言は真正であり、真実性（如性）を有するものです。真実の究極（実際）に根ざしたものですから、^(38→)法界においては区別（*bhinna）はありません^{←38)}。³⁹⁾
- 12 法界 [Zh751] から生起なされた〔あなた〕は、まるで虚空のようであり、甚深の智を有し、方便に巧みであり清浄です。世尊よ、〔そういう〕あなたに私は敬意を表します」

その時、良家の子であるジャヤマティは世尊に対して、「法界との無区別」

36) Ch2はこの偈を欠く。

37) この偈の2漢訳は「仏陀（導師）は声によって私に予言を与えて下さったが、声も予言もともに寂靜（寂寞）です」という趣旨。

38) Tib:chos kyi dbyings la tha dad med. Ch2: 不壞於法界。

39) Ch1はこの偈自体を欠く。

に関するこれらの詩頌によって讃嘆して後、世尊の両足に頭をつけて挨拶をし、世尊の周りを三回まわってのち、一角に坐った。

IX-5⁴⁰⁾

「具寿シャーリプトラよ、〔以上、語られたことは〕[H451a] マンジュシュリーの神通神変の奇蹟 (**rddhivikurvaṇaprātihārya*) と説法神変の奇蹟 (**dharmaśānanāvikurvaṇaprātihārya*) のごく一部 (**pradeśamātra*) ですが、私が目の当たりにしたことそのままです。そのように、世尊の面前において、マンジュシュリーの神通神変の奇蹟と説法神変の奇蹟とを目の当たりにした通りに互いに (**anyonyam*) 語り合ったものです」

XII アーナンダへの経の委嘱

その時、世尊はアーナンダにこう仰せになられた。「アーナンダよ、この法門を護持しなさい。保持しなさい。読誦しなさい。よく理解しなさい。他の人々に詳しく説明しなさい」

〔アーナンダが〕申し上げる。「世尊よ、私がこの法門を護持する場合、世尊よ、この法門の名は何でしょうか。[P316b] これをどのように護持すべきでしょうか」

世尊が仰せになる。「それゆえ、アーナンダよ、この法門は『マンジュシュリー法王子の加持神変』 (**adhiṣṭhitavikurvaṇa*)、『法に適ったやり方によるあらゆる魔と怨敵の粉碎と絶滅』、『宝が生じる根拠の教示』、[Zh752] 『宝の小

40) 前後の文脈から遊離した唐突なこの一節は、Zh が依拠したすべての版本と、筆者が使用した3写本に見られるが、2漢訳には見られない。この一節は本来 IX-4 の後におかれるべき内容である。シャーリプトラがスプーティに話す回想の最後、アーナンダとマハー・カーシャパのそれぞれがシャーリプトラに報告する回想の最後にも同様の表現が置かれているからである。最後の一文が4大弟子による回想報告の終結を示している。この場合、「互いに (**anyonyam*)」というのは、4人の誰かが、他の一人に」という意味である。ジャヤマティの仏教転宗は「現在」の会座の出来事であり、それゆえ、ジャヤマティが成仏の授記を得た後、仏陀讃嘆の偈を述べて座に坐ったとき、仏陀がアーナンダへの法の委嘱を述べ、その会座にいたマンジュシュリー、ジャヤマティ、そしてアーナンダが歓喜したのである。

箱』というものとして [H451b] 護持しなさい」

世尊がこのように仰せになられた時、マンジュシュリー法王子、ジャヤマティ菩薩、具寿アーナンダ、菩薩たち、偉大な声聞たち、天人・人間・アスラ・ガンダルヴァを含む世間〔の人たちは〕は、歡喜して、世尊の言葉をほめ讃えた。

「宝の小箱」という大乘經典が完結した。⁽⁴²⁾ 翻訳官であるラトナラクシタが翻訳し、語改訂⁽⁴¹⁾に基づいて校訂し、確定した。⁽⁴²⁾

3 おわりに

この『宝篋經』は、主要な仏弟子（スプーティ、シャーリプトラ、アーナンダ、マハー・カーシャパ、プールナ・マイトラーヤニープトラ）と、最後には仏弟子となる遊行者ジャヤマティによるマンジュシュリーとの対話が中心になっている。最初のスプーティと最後に登場するジャヤマティについては「現在」の出来事として描かれているが、シャーリプトラなど主要4弟子とマンジュシュリーとの関係は回想という形で示される⁽⁴³⁾。また、すでに示したように⁽⁴⁴⁾、マンジュシュリーの特性は、圧倒的なスケールの神変（神足の奇蹟）と、空性に基づく大乘の教えの教誡（説法の奇蹟）である。彼に独特の大神変は回想の中でしか示されていないのに対して、彼による大乘の説示は全編に散りばめられている。しかも、この經の特徴の一つは、内容的には「空・不二」を説く大乘經典でありながら、「空・空性」「大乘」という用語の使用例が極めて少

41) Tib: skad gsar (C:gser) bcad. 「新定語」「決定訳語」とも訳される。斎藤 [2000] 121, 130頁 (注4) 参照。

42) CDHNP:zhu (HH:zhus) chen gyi lo tstsha (HN:tsā) ba bande ratna (CP:radna) rakṣi tas zhus te skad gsar (C:gser) bcad (omitted in C) kyis kyang (C adds:ca) bcos nas gtan la phab pa. KT:lo tstsha ba bandhe rin chen 'tshos (K:mtshos) bsgyur cing zhus. Phはこの一節を欠く。

43) 注40参照。

44) 五島 [2014] 42-44頁、[2015a] 43-45頁。なお、マンジュシュリーの人物像や彼と「3種の奇蹟 (prātihārya)」との関係については五島 [2015b] 参照。

ないということである。

例えば、「空・空性」に関しては、〈一切法は仏法であり、最初から最後まで（終始一貫して）真如から後退することがない。最初とは空性で、最後とは遠離であるが、黄金（*suvarṇa）と金（*kanaka）の関係のように、空性も遠離も、単に言語契約（*saṃketa）による概念表示（*prajñapti）の違いにすぎず、実質上の相異はない〉（II-2、取意）とし、「真如と空性から生まれた菩薩」（II-8）、「〔カラヴィンカの〕空・無相・無願の声（III）、「魔の力は邪見の力、菩薩の力は空性の力」（VII-2）、「空性・無相・無願という解脱への門」（IX-2）、「〔毒というのは〕空性を恐れること」（VII-4）、「勝義の空性という印」（XI-1）、「空の界」（XI-4）というのが本經に見られる用例のすべてである。「大乘」に関しても、「世尊よ、私は以前にも、遊行者ウドラカと〔私の〕一族である遊行者『月をもつ（月に照らされる）者』から、この大乘の功德を称賛する話を、いささかですが、聞いていました」（X-2）が唯一の例で、近い例として「一切知・平等性の乗（大乘）への予言」（XI-3）があるだけである。これは、「三つの乗り物の〔それぞれに応じた〕道を教示するという特質ゆえに、偉大な隊商のリーダー（*sārthavāha）であることが菩薩の鎧です」（VIII-3）とあるように、乗（教え）には本来的な区別はなく、教化対象の機根に応じて乗（教え）が示されるという思想が根底にあるからであろう。乗ばかりでなく、たとえば「法の世界〔法界〕と空間の世界（虚空界）と人々の世界（衆生界）は、不二であって、二なるもの（別のもの）として分けられない」（VIII-2）とあるように、あらゆるものに「二なるもの」「区別」がないのである⁴⁵⁾。これを經の最後でまとめたのが、XI-4の「法界との無区別（*abhinna）」という

45) そのほか、「不二」とそれに類する他の表現例は以下の通り。

「完全なる理解は〔対立する〕二つを離れている」（IX-3）「このように〔対立する〕二つ〔のもの〕を正しく観察することはない」（IX-3）「勝義諦（究極的な真実）においては四諦の確立など存在せず、それが矛盾のないことなのです。道という因に従うことと〔滅という〕果を得ることとが二であり、二であるものは矛盾なのです。道の平等性故に一切の法が平等であること、これが二のないことであり、およそ二のないものは矛盾しません」（IX-4）「慢心のないことが矛盾のないことです。矛盾のないこと、それが二のないことなのです」（IX-4）「有為の界たるもの、無為の界たるもの、それらは法界として不二です」（XI-4）

12偈である。ここではあらゆる領域（カテゴリー）による分類は（狭義の「法界」という領域を含めて）広義の「法界」と無区別であり同等であること、つまり、すべての設定された領域というものは広義の法界のもとでは同等で平等だということになる。ここではもはや、声聞・独覚と菩薩の区別はもちろん、男と女、仏教徒と異教徒の区別もないことになる⁴⁶⁾。

これで『宝篋経』の和訳・訳註を終えるが、経名としてあげられる『宝の小箱』『宝が生じる根拠の教示』の意味を含めて明確になっていない点は少なくない。引き続き研究を続けていく所存である。

〔略号〕

- Divy* *Divyāvādāna*, P.L.Vaidya (ed.) BST No.20, Darbhanga, 1959.
Gv *Gaṇḍavyūhasūtra*, edited by P. L. Vaidya, BST No.5, Darbhanga, 1960.
LV *Lalitavistara*, Edited by P. L. Vaidya, BST No.1, Darbhanga, 1958.
Mvy *Mahāvīyūtpatti*: 『梵藏漢和四譯對校・翻譯名義大集』鈴木学術財団、1916。
RP *Rāṣṭrapālapariprcchā*, P.L.Vaidya (ed.) BST No.17, Darbhanga, 1961, pp.120-160.
SP *Saddharmapuṇḍarīkasūtra*, Kern and Nanjio (eds.), St.Petersburg, 1912.
VKN *Vimalakīrtinirdeśa*, *Transliterated Sanskrit Text Collated with Tibetan and Chinese Translations*, edited by Study Group on Buddhist Sanskrit Literature, The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University, 2004.

〔参考文献〕

- 五島清隆 [2001]: 「チベット訳『有徳女所問経』(I) 和訳」『佛教大学仏教学会紀要』第9号、1-43頁。
——— [2013]: 「チベット訳『宝篋経』一和訳と訳注(1)」『佛教大学仏教学部論集』第97号、29-56頁。
——— [2014]: 「チベット訳『宝篋経』一和訳と訳注(2)」『佛教大学仏教学部論集』第98号、27-54頁。

46) 機根の違いはあるものの男女に区別がないことを示している例は〈雨安居を過ごしていたはずのマンジュシュリーは、プラセーナジット王の後宮にいる五百人の女性たちのほか、男性、少年、少女、娼婦たちをそれぞれ五百人ずつ無上正等覚から退転しない境地に導き、その他の多くの人たちを声聞乗へと導いて天界に行くようにした〉(VIII-2、取意) ことである。異教徒については、この経のテーマの一つであり、〈この教えを聞いたことによって裸形行者サティヤカ・ニルグランティープトラもマイトレヤ(弥勒)如来の最初の集会において、今のシャーリプトラのように、智慧第一の仏弟子となるであろう〉(IX-1、取意) としている。

- [2015a]: 「チベット訳『宝篋経』一和訳と訳注(3)」『佛教大学仏教学部論集』第99号、29-54頁。
- [2015b]: 「文殊菩薩と3種の奇蹟 (prātihārya)」『佛教大学仏教学会紀要』第20号、1-18頁。
- [2018]: 「チベット訳『宝篋経』一和訳と訳注(4-1)」『佛教大学仏教学会紀要』第23号、1-38頁。
- 斎藤直樹 [2000]: 「Lo tsa ba (翻訳者) Vairocanarakṣita--skad gsar bcad (語改定) 以前の翻訳の特徴 (佛教をいかに学ぶか—佛教研究の方法論的反省)」『日本仏教学会年報』第66号、121-132頁。